

平成 27 年 7 月 16 日、政策秘書課職員との話です。

今、なぜ、つながりが必要なのか

職員が仕事の進め方に悩んでいて、いろいろと話をしました。その中で、「市長が、なぜ、“つながりが必要”と言うのか分からない」と言われました。

日本が豊かになる前、日本人は、毎日、体を動かして暮らしていました。私の母は、朝から晩まで、座る暇もないほど、家のことや農作業に忙しく働いていました。私自身も、小学生の頃は、家にいると、次から次へと手伝いをさせられるので、学校に行くのが楽しくて仕方がなかったのを覚えています。学校にいる時間は、手伝いをしなくてもいいからです。

今の日本はどうでしょう。お金があれば、ほとんど何でもやってもらえます。お金を払えば、自分でやる必要はありません。昔は、「村八分」という言葉がありました。葬式と火事の 2 つを除いたお付き合いは、絶交すると言うのが語源のようですが、今は、「村十分」でも困らないでしょう。

しかし、東日本大震災のような大きな災害のときには、お金があっても、何ともなりません。行政も頼りにはなりません。今、保育士や看護師、介護職員が不足、自治体で奪い合いが起きています。10 年先には介護職は、全国で 38 万人も不足すると言われていています。お金を払ってプロに任せたくても、そのプロが足りず、問題が解決できない時代が間もなくやってきます。

災害と高齢化は、全国の自治体が抱える問題ですが、長久手市は、幸いなことに災害も少なく、今のところ高齢化率も非常に低い状態です。とはいえ、必ず、長久手市にも高齢化の波はやってきます。災害もいつ、起きるか分かりません。今のわずらわしいことのない、快適な日常に慣れきって、このまま何も対策をしないで良いのでしょうか。

だからこそ、今、“つながりが必要だ。そのためにできることを一緒に考えよう”と言っているのです。

“つながりがある”とはどういうことでしょうか。

市民同士がつながるには、お互いが気にかける必要があります。それをわずらわしいと感じる人もいるでしょう。しかし、私は、絆やつながりは、あいさつをしたり、注意されたり、お互いにおせっかいをしたりといった、わずらわしいことがなければ、生まれないものだと思います。

市民同士につながりが生まれたとき、まちのあり方を考える主役は、これまでの行

政や学者などの専門家ではなく、そこに暮らす市民に変わっていくはずです。

まちに暮らす一員として

今年3月、市内3つの中学校で、当時の2年生に、「将来の長久手」について作文を書いてもらいました。作文の内容は、3つの中学校区ごとに特徴があったのですが、長久手中学校では、特に通学路のごみについて書いている生徒が多く、「将来は、ごみのない長久手市にしたい」という意見が数多くありました。



7月、長久手中学校に伺い、作文を書いた生徒たちと意見交換を行いました。ごみの話になり、生徒からは「ごみを減らすキャンペーンを市主催でやってほしい」という提案がありましたので、私から反対に、「君たちが毎日、通学途中に1つずつごみを捨てるのはどうだい？ 一度にたくさん捨てるのは大変だけど、1つだけ捨てるなら、小さな袋があればできる。毎日、一人1つごみを捨てるだけでも、ごみは減ると思う」と逆提案をしたところ、「生徒会で考えてみます。そのためには、通学途中で集めたごみを捨てるために、学校の入り口にごみ箱を置いてほしい」という話になりました。

「市にやってもらう」のではなく、自分たちが能動的に動くことを中学生が選びました。子ども達も、長久手市に暮らす一員として、まちのことを真剣に考えています。私たち大人も、一緒にまちのことを考えようではありませんか。

～市長の話を聞いて～

南中での意見交換の場で、「納涼まつりを続けてほしい」と市長に質問をした生徒に対し、市長は、「市民有志が実行委員会を作り、違う形での祭りを自分達で計画している。そこに協力してはどうだ」と提案をしたところ、その中学生は、自ら実行委員に電話をし、友達も誘って募金活動や当日の手伝いなどをしていたと聞きました。中学生の行動力には、頭が下がりました。すごいと思います。

大人の私たちも、「やりたいこと、やれること、やれる人から無理なくはじめ、楽しく続ける」ことから、まちを一緒に作っていかれたらと思いました。